

令和4年
9月30日

病害虫発生予報 10月号

茨城県病害虫防除所

**イネ縞葉枯病対策のため、水稻の収穫後はすみやかに耕起し、
ひこばえ（再生稲）をすき込みましょう！**

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ：ハダニ類	1
冬レタス：すそ枯病	1
秋冬ネギ：ネギアザミウマ	2
共通害虫：シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、ハスモンヨトウ	2

- ナシ黒星病の秋季防除と落葉処理を徹底しましょう！ 4
- サツマイモ基腐病の防除対策（収穫期～貯蔵期） 5

【その他の病害虫】

ナシ、ブドウ、イチゴ、促成トマト、秋冬ネギ	6
-----------------------	---

【防除所レポート】

令和4年の水稻における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応	7
--------------------------------	---

II. 今月の気象予報 9

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>
フェロモントラップデータ随時更新中



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、寄生葉率（本年値 11.4%、平年値 3.5%）、発生地点率（本年値 60%、平年値 25%）ともに平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。特にビニール被覆後はハウス内が増殖に適した環境になるので注意する。
- ② 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

冬レタス

1. すそ枯病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県西地域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、発病株率（本年値 3.6%、平年値 0.04%）、発生地点率（本年値 27%、平年値 1%）ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 本病は気温が 20～25℃で降雨が多いと発生が多くなるため、気象条件を考慮しながら防除を行う。
- ② 多発すると防除が困難となるため初期防除を徹底する。
- ③ 薬剤散布は、収穫前日数、使用回数等に十分注意し、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。
- ④ 被害葉は翌年の伝染源となるため、圃場外に持ち出し適切に処分する。

秋冬ネギ

1. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、被害度^{*}（本年値 51.0、平年値 33.7）、芯葉の被害株率（本年値 100%、平年値 82.8%）ともに平年より高い。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 雑草にも寄生するため、圃場周辺の除草を徹底する。
- ② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

共通害虫

1. シロイチモジヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間（8月26日～9月25日）のフェロモントラップへの誘殺数は、つくば市および笠間市で平年より多い。
- ② 9月下旬現在、大豆、秋冬ハクサイ、冬レタス、秋冬ネギの圃場で発生を認めている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 圃場をよく観察し、若齢幼虫の早期発見に努める。中齢以降になると薬剤の効果が低くなるだけでなく、作物内に食入し薬剤が届きにくくなるので若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② 結球葉菜類では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培ではハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤を用いてローテーション散布を行う。
- ⑤ 令和2年度に主要薬剤の殺虫効果について試験を行ったので適用条件に注意して参考にする。

（令和3年3月24日発表 病害虫発生予報4月号 p7-8 防除所レポート参照）

2. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間（8月21日～9月20日）のフェロモントラップへの誘殺数は、土浦市および筑西市で平年より多く、笠間市で平年よりやや多い～多く、水戸市および坂東市で平年よりやや多く、龍ヶ崎市で平年より少ない。
- ② 9月下旬現在、ハクサイ圃場での寄生幼虫数は平年よりやや多い～多く、大豆圃場での寄生幼虫数は平年よりやや多く、イチゴ圃場での被害株率は平年よりやや高い。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置して成虫の侵入防止に努める。
- ② 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。なお、防除適期はフェロモントラップへの誘殺数が増加したときであるが、作物の種類や生育ステージなどを考慮して判断する。病害虫防除所ホームページに、誘殺状況を公開しているので参考にする。
- ③ レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ④ 施設栽培では低温期でも加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

3. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

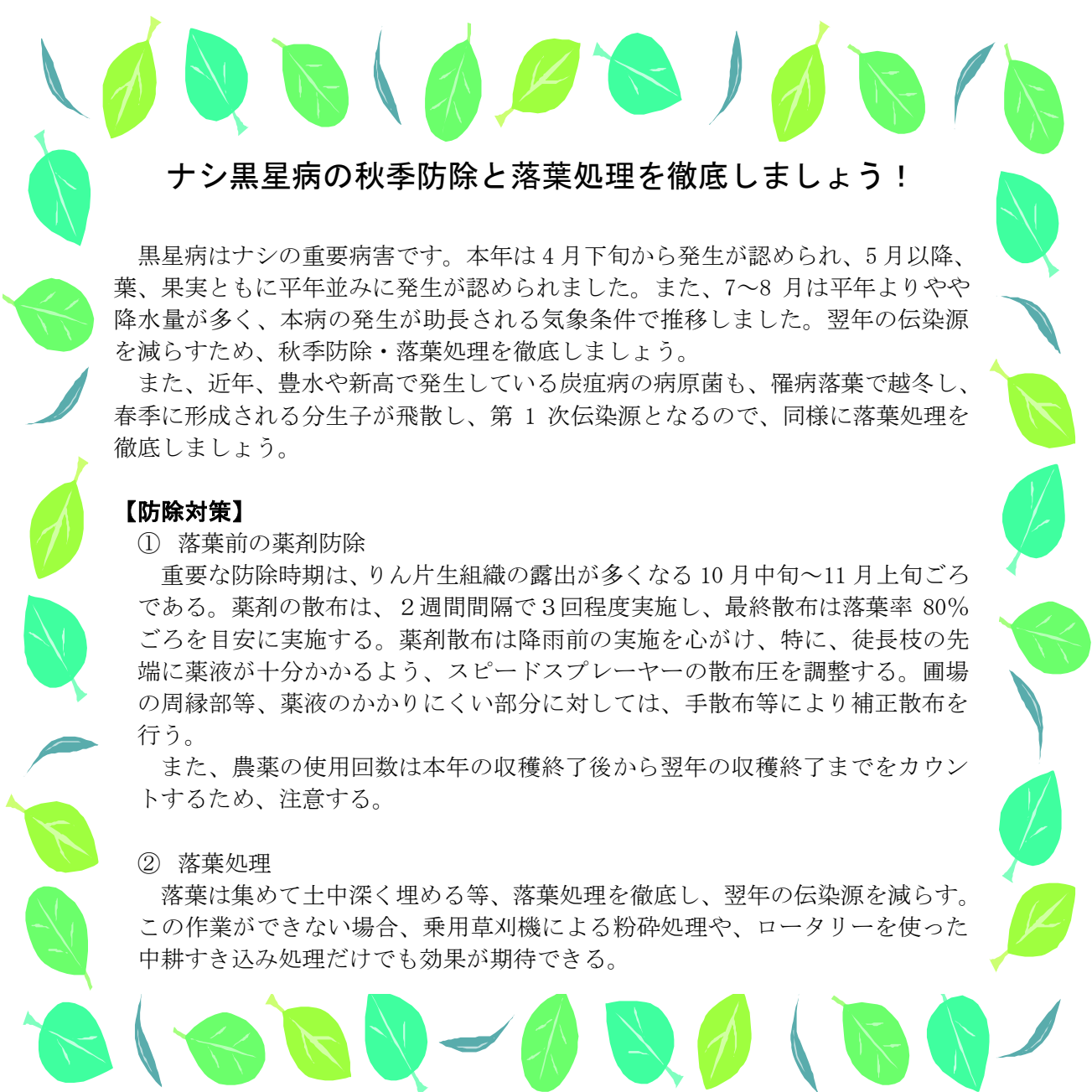
[予報の根拠]

- ① 直近1か月間（8月21日～9月20日）のフェロモントラップへの誘殺数は、土浦市、笠間市および鹿嶋市で平年よりやや多く、筑西市、銚田市および龍ヶ崎市で平年並、水戸市で平年よりやや少ない。
- ② 9月下旬現在、大豆圃場での寄生幼虫数は平年よりやや多く、イチゴ圃場での被害株率は平年並～やや高い。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

(共通害虫 続き)

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置して成虫の侵入防止に努める。
- ② 圃場をよく観察し、集団で生息する若齢幼虫の早期発見に努める。中齢以降になると、食害量が増大するだけでなく、薬剤の効果も低くなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。なお、防除適期はフェロモントラップへの誘殺数がピークになった直後であるが、作物の種類や生育ステージなどを考慮して判断する。病虫害防除所ホームページに、誘殺状況を公開しているので参考にする。
- ③ レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ④ 施設栽培では低温期でも加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。



ナシ黒星病の秋季防除と落葉処理を徹底しましょう！

黒星病はナシの重要病害です。本年は4月下旬から発生が認められ、5月以降、葉、果実ともに平年並みに発生が認められました。また、7～8月は平年よりやや降水量が多く、本病の発生が助長される気象条件で推移しました。翌年の伝染源を減らすため、秋季防除・落葉処理を徹底しましょう。

また、近年、豊水や新高で発生している炭疽病の病原菌も、罹病落葉で越冬し、春季に形成される分生子が飛散し、第1次伝染源となるので、同様に落葉処理を徹底しましょう。

【防除対策】

① 落葉前の薬剤防除

重要な防除時期は、りん片生組織の露出が多くなる10月中旬～11月上旬ごろである。薬剤の散布は、2週間間隔で3回程度実施し、最終散布は落葉率80%ごろを目安に実施する。薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、特に、徒長枝の先端に薬液が十分かかるよう、スピードスプレーヤーの散布圧を調整する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

また、農薬の使用回数は本年の収穫終了後から翌年の収穫終了までをカウントするため、注意する。

② 落葉処理

落葉は集めて土中深く埋める等、落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。この作業ができない場合、乗用草刈機による粉碎処理や、ロータリーを使った中耕すき込み処理だけでも効果が期待できる。

サツマイモ基腐病の防除対策（収穫期～貯蔵期）

本病の発生は全国的に拡大しており、茨城県では令和3年6月に初確認されました。育苗から生育期、収穫から貯蔵まで、年間を通して被害が発生するおそれがあるので、侵入防止と早期発見・早期対策に努めましょう。

[病気の特徴]

糸状菌（カビ）により引き起こされ、保菌した苗・イモ・残さ（葉や茎の残がい）等が伝染源となる。見かけ上は健全な苗やイモでも保菌している可能性があり、発病したイモに接すると、健全なイモにも伝染する。

【収穫の準備】

- ・使用するコンテナ等は、洗浄し土を完全に落とし、資材消毒剤で消毒する。
※消毒後は水洗いし、よく乾燥させる。
- ・収穫前に必ず圃場をよく観察し、①生育不良、②株元の黒変を伴う葉の変色、③枯死株等の異常がないか確認する。

【収穫時】

- ・収穫したイモは、どこの圃場で生産されたものか後から追跡できるよう、圃場名を記録しておく。また、収穫したイモは圃場ごとに管理する。
- ・なりつるの黒変、イモのなり首側からの変色や腐敗がないか、イモから芽が出ていないか（萌芽）注意する。
- ・他の圃場で作業する前には、農機具や長靴についた土は良く落とし、水できれいに洗浄する。
※コンテナや農機具、長靴等の洗浄は、圃場の近くでは行わない。

【収穫時に発病株を確認した場合】

- ・収穫時に疑わしい症状を見つけた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターまで連絡する。
- ・普及センターが確認するまで、株の抜き取りは行わず、圃場に入らないこと。

【貯蔵中】

- ・収穫時、見かけ上は健全なイモでも、貯蔵中にイモに症状が現れることがある。貯蔵中のイモは月に1回程度、異常がないか確認する。
- ・貯蔵中に症状が出ているイモを見つけた場合、そのイモを貯蔵しているコンテナを隔離する。
- ・貯蔵中、疑わしい症状を見つけた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターまで連絡する。

【次作に向けた準備】

- ・収穫終了後の残さ（イモ、葉や茎の残がい）はできるだけ持ち出し、適切に処分する。
- ・収穫後速やかに、圃場を丁寧に耕うんし、残された残さを細かく粉砕する。
- ・圃場に停滞水が生じないように、排水対策（収穫後に耕盤破碎等）を行う。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
ナシ	黒星病	発生量：－	9月下旬現在、発病葉率は県南地域で平年より高く、県北、県央、県西で平年並である。落葉前の秋季防除を徹底する。罹病葉は翌年の伝染源となるため、落葉を適切に処理する。
	ハダニ類	発生量：－	9月下旬現在、平年並の発生である。多発している圃場では、秋季、休眠期および翌春の防除を徹底する。
ブドウ	べと病	発生量：－	9月下旬現在、平年よりやや多い発生である。罹病葉は翌年の伝染源となるため、落葉前の秋季防除を徹底する。
	ハダニ類	発生量：－	9月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	9月下旬現在、平年並の発生である。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	9月下旬現在、平年よりやや多い発生である。増殖が早いため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
トマト 促成	黄化葉巻病	発生量：－	9月上旬現在、抑制トマトの一部圃場で発生がみられている。促成トマトにおいて、タバココナジラミの侵入防止、発病株の抜き取り等、防除対策を徹底する。
秋冬ネギ	黒斑病(葉枯病を含む)	発生量：平年並	9月下旬現在、平年並の発生である。
	ネギハモグリバエ		

令和4年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応

県内の調査圃場（57 圃場）等の調査結果をもとに、本年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応についてまとめましたので、参考にしてください。

1. 縞葉枯病

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。ヒメトビウンカの幼虫はイネ科雑草で越冬し、4月上旬頃に羽化して麦畑へ移動、増殖した後、6月上旬頃に成虫が本田に飛来する。水稲は、イネ縞葉枯ウイルス（以下、RSV）を保毒したヒメトビウンカに吸汁されると RSV に感染・発病する。発病後に治療はできないため、ヒメトビウンカを防除して、感染の機会を減らすことが重要である。

[本年の発生状況]

8月上旬調査では、県内全域で本病の発生を確認し、県西地域の発生地点率は、引き続き高い傾向であった（図1）。県西地域の発病株率は、発生が多かった平成26年～令和元年と比較すると低く、令和2～3年と同程度であった（図2）。

県西地域以外では、発生地点率及び発病株率は、県央地域で平年より高く、県北・鹿行地域で平年よりやや高く、県南地域で平年並であった（図1、2）。

次年度以降の本病の発生を少なくするために、速やかな秋季耕起等、引き続き、徹底した防除対策が必要である。

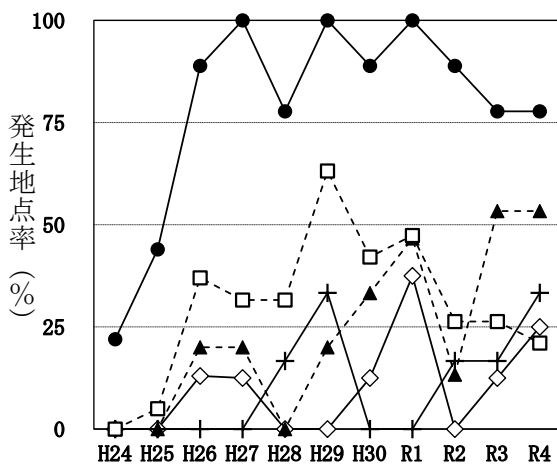


図1 イネ縞葉枯病の発生地点率の年次推移
(8月上旬)

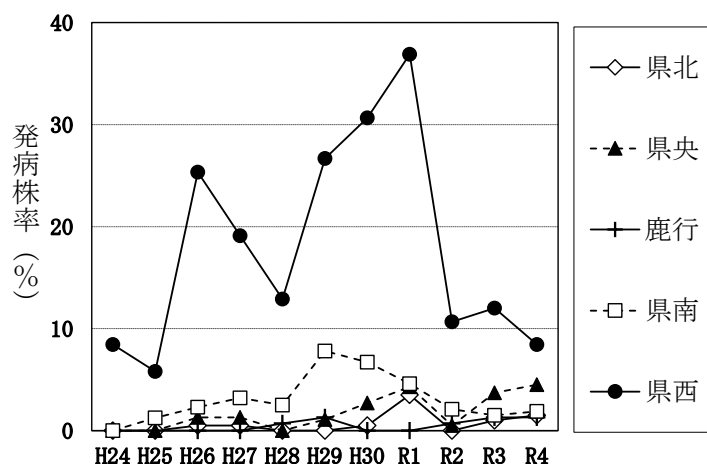


図2 イネ縞葉枯病の発病株率の年次推移
(8月上旬)

※県北 8～9 地点、県央 15 地点、鹿行 6 地点、県南 19 地点、県西 9 地点調査。

※R3、4 は、県北、県西各 1 地点では、縞葉枯病抵抗性品種作付け場で調査を行った。

[次作に向けた対応]

- ① RSV を保毒したヒメトビウンカが翌年の感染源となる。ひこばえ（再生稲）は、ヒメトビウンカの増殖・越冬場所となる他、ひこばえが発病株である場合、ヒメトビウンカの保毒虫率上昇の原因となるため、収穫後は速やかに耕起する。
- ② 畦畔、土手等のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所となるため、除草に努める。
- ③ 近年発生の多い地域では、育苗箱施用剤を使用するとともに、本田防除の実施を検討する。
- ④ 縞葉枯病抵抗性品種はほとんど発病せず、保毒虫率を徐々に下げる効果が期待できるため、抵抗性品種の導入を積極的に検討する。

2. いもち病

前年の籾や被害わらで越冬して伝染源となり、低温・日照不足・多湿等の気象条件で発生が助長される病害である。葉いもちは例年梅雨入り後の6月下旬から発生し始め、7月に最も発生が多くなる。その後、出穂期頃に降雨が続くと、穂いもちが多発生する。

[本年の発生経過]

葉いもちは、6月下旬～7月下旬にかけて平年よりやや多い発生が認められ、一部圃場で上位葉での発生が認められた。穂いもちは、9月上旬には、平年並の発生が認められた。

[次作に向けた対応]

- ① 種子は必ず更新し、未消毒の種子を使用する場合は種子消毒を行う。
- ② 常発地では育苗箱施用剤を使用する。

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、イネカメムシ等）

成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息する。出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。孵化した幼虫も同様に収穫期まで穂を加害する。

[本年の発生経過]

- ① 水田内における斑点米カメムシ類のすくい取り調査は、7月下旬調査では、イネカメムシの虫数（本年値 1.31 頭、平年値 0.05 頭）は平年より多く、発生地点率（本年値 5%、平年値 2%）は平年よりやや高かった。クモヘリカメムシの虫数（本年値 0.39 頭、平年値 0.44 頭）は平年並、発生地点率（本年値 14%、平年値 11%）は平年並～やや高かった。
- ② 地域別でみたイネカメムシの虫数は、県南、県西地域で平年より多く、クモヘリカメムシの虫数は、県北、県南、県西で平年よりやや多かった。
- ③ 8月下旬調査では、イネカメムシの虫数は平年並、クモヘリカメムシの虫数は平年よりやや少なかった。
- ④ 令和2年8月に、発生が確認されたミナミアオカメムシは、本年5月、県南地域の小麦圃場で発生を確認した。予察灯には、県南地域で7月中旬、9月上旬、県央地域で8月下旬、9月上旬に誘殺された。

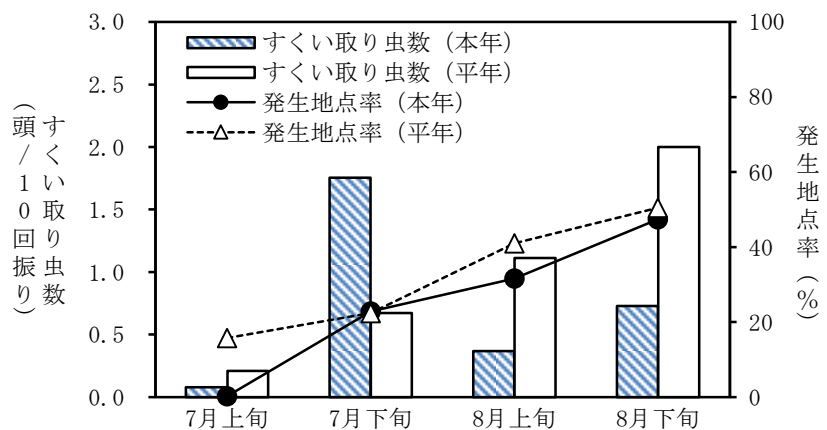


図3 水田内における斑点米カメムシ類捕獲の推移

[次作における対応]

- ① 水田周辺のイネ科雑草は、カメムシ類の生息場所となるので除草に努める。ただし、出穂期近くになってからの除草は、カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、水稻の出穂2週間前までに終わらせる。
- ② 不稔被害の軽減を目的とした防除は、出穂期～穂揃期に行う。出穂期前後の圃場で成虫や幼虫を確認した場合は防除を実施する。
- ③ 乳熟期以降の幼虫密度が高いと斑点米の発生量が多くなる。斑点米被害の軽減を目的とした防除は、出穂後10～15日頃（乳熟期）に行う。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 10月1日から10月30日)

気象庁(9月29日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	20	30	50
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<1週目の予報> 10月1日(土曜日)から10月7日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率70%

<2週目の予報> 10月8日(土曜日)から10月14日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<3週目から4週目の予報> 10月15日(土曜日)から10月28日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。